雑木林ボランティアー都市公園の雑木林の新しい利用

Coppice Volunteer – New Use of Coppice in Urban Park

倉本 宣* Noboru KURAMOTO

1. はじめに

都立桜ヶ丘公園は多摩ニュータウンの東の端に位置する面積 20ha ほどの雑木林を生かした丘陵地公園である。東京都は雑木林を主体とし、丘陵地に位置する 10 箇所の都立公園を管理していて、丘陵地公園と呼んでいる。1990 年に桜ヶ丘公園にボランティア活動を導入することになって、自然解説、自然環境のモニタリングなどいくつかの案が生まれ、最終的に決まったのが、雑木林の植生管理を行うボランティア活動であった。

「ボランティア」と「雑木林」の言葉の組み合わせは、ボランティアの案内書をもて他には見つからない。この名称のユニークさも手伝って、毎年多くの登録希望者が説明会を訪れる。ボランティアの希望の動機は、自然のなかで汗を流したいというものである。汗を流すことが雑木林の保全のために役に立つのなら、もっといいのである。実際には、活動はどのボランティアにとっても無理のないように計画しているので、物足りなく感じているボランティアもいるかもしれないが。

2. 新しい野外レクリエーション

雑木林ボランティアの活動は作業、作業の産物を利用したクラフト、作業の影響の調査、周囲の市民と雑木林の楽しさを分かち合う自然教室、ボランティア自身ももっと雑木林について知るための研修から成り立っている(図1)¹⁾。この活動をやっている、雑木林ボランティアが新しいタイプの野外レクリエーションの一つであることに気づいた。笹を刈ることはストレスの解消になる、毎日仕事で忙しいけれどもここに来ることで活力が取り戻せる、そんな言葉を何度も耳にしたからである。雑木林ボランティアのような植生管理作業はどこでもできるわけではない。雑木林がなくてはできない活動なので、丘陵地公園は新しい野外レクリエーションとしての植生管理作業という利用を積極的に展開していくことを都民から求められているのである。

3. 利用者の一員

ボランティアも公園の新しい利用ではあっても、利用者の一員であるという観点に立つと、ボランティアを公園のなかで特別扱いせず、結果的にボランティア活動を長続きさせることができる。あるとき、「車で通勤している職員がいるのだからボランティアも車で通えるように配慮してもらいたい」という要望が出されたことがある。これはいろいろ考えた末にお断りすることにした。ボランティア活動が公園の新しい利用形態であるとするれば、一般の利用者となるべく同じようにしておいた方が他の利用者との対立を招かないで済むと考えたからである。そうは言っても、立ち入りを制限している雑木林のなかで作業ができることはある意味では特権である。特権を最小限にすることを意識する必要がある。

同時に、行政が基本的に担うべき仕事は行政が行い、それにプラスする部分についてボランティアが担当しているという意識で行政の担当者はボランティアと接するようにしている。行政の下請けとなってしまうのは、活動の魅力がなくなってしまうからである。

4. 目的の浸透

桜ヶ丘公園雑木林ボランティアは行政側の働きかけによって成立したものであるが、ずっと行政が関わり続ける必要があるとは考えていない。ボランティアの一人である内沼昌子さんの書いてくれたマンガによるボランティアの紹介をみればわかるように、二次的な自然の植生管理の意義はボランティアによく浸透している(図2)。それは、作業の体験に負うところが大きい。別の丘陵地公園において雑木林の維持のために皆伐更新を行ったところ、周囲の住民から多くの抗議が寄せられたことがあった。そのことをボランティアたちに話したところ、抗議した人達もしばらく雑木林ボランティアの活動をやってみれば、なぜ木を伐って更新するのか理解してもらえるはずだという意見が複数のボランティアから出された。

* (財) 東京都公園協会桜ヶ丘公園管理所 (現 東京都環境保全局)

活動の目的を一人一人のボランティアが持つようになってからは、活動日の運営や活動の企画をボランティアが自主的に立てるようにしている。

5. 自己評価の契機

ボランティアの活動がすべて雑木林のためになるとは限らない。アズマネザサを刈ったところ、たくさんの利用者が入り込んで、林床が裸地化してしまったことがあった。雑木林のために良かれと思っていたことも、それが雑木林のためになっているかを評価してみなければ全く逆効果になっている危険もある。評価は雑木林が語りかけている言葉（例えば裸地が広がっている）に耳を傾けることによって可能になる。雑木林からのメッセージを受け止めることができるかどうかは聞く側の人間にかかっているので、意識的に調査のプログラムを活動に組み込んでいく。

6. 市民自治のために

ボランティアの活動における企画などの意思決定はできるだけ多くの人が参画できるように、委員を決めないで、企画会議に出席した人の責任において決めていくことにしている。これは運営委員を決めようという提案に対して、みんな平等の立場で活動に関わりたいというボランティアの意思を尊重した結果である。

自分たちが合意した内容が雑木林にとってどうだったかは雑木林が応えてくれる。合意形成の手法や行政との関わり方をいつの間にか身につけることができる。雑木林ボランティアの活動はボランティアの生活を維持するものではないので、生計を立てるという点でみれば多少の失敗も許される。そのような活動領域で市民自治の実験を行うことが可能となる。

もちろん、ボランティアには桜ヶ丘公園の雑木林に対して責任がある。それを意識しながら、行政も含めて自分たちの合意形成を行い、その結果を雑木林の声を聞いて確かめて次のステップに進んでいく。ここにはある意味では市民自治の原点があると考えている。

引用文献

- 1) 東京都公園協会（1992～1995）：桜ヶ丘公園雑木林ボランティア活動記録集

図1 雑木林ボランティアの活動の体系¹⁾

図2 雑木林ボランティアの紹介（内沼昌子作）¹⁾